



人々智囊大徳方寶書

全九冊

錦囊方家節用寶 全一冊

此書は家日用のあらゆる事の重宝なり。八  
十條と集めては、いふは、分々の節用集、  
万物強弱の別、象圖彙と出す。のほかに、日  
月星辰、草木、羽毛、鱗、芥の細さ、近国、山川、人  
物、生類、草木、其外、大地のあらゆる地味、  
集めて、世の年中、行事、一切、事、事、其外、月  
日に抱くもの、守集、味、節用、宝、なり。

袖中童子往來 小本全一冊

此書の趣、訓、往來、実語、教、示、は、採、の、歌、を、か  
ら、附、して、巻、く、集、め、の、世、繪、と、な、り、子、供、の、も  
て、あ、そ、び、の、事、を、あ、つ、ら、く、讀、み、と、海、外、に、せ  
ら、せ、後、に、あ、つ、ら、く、文、の、漸、た、り、の、成、中、に、べ、く、

築山山水傳

全二冊

此書の趣、築山の山水の傳、なり。其の趣、  
の、傳、之内、に、て、も、此、書、と、見、て、作、ら、る、事、の、法、の、  
叶、ひ、其、家、業、に、あ、つ、ら、く、べ、く、

新撰李分部類字引 小本 全一冊

此書は、李分部類字引、なり。其の趣、  
い、ろ、は、分、字、の、引、を、し、て、ま、は、り、の、換、字、を、ま、し、る、補、  
其、中、の、船、語、の、用、の、多、く、は、口、部、毎、  
の、月、令、土、月、を、て、系、物、と、ま、す、り、て、船、語、  
の、多、く、は、傳、を、ま、し、る、い、ろ、は、分、字、を、し、て、い、ろ、  
世、用、と、ま、す、り、ま、ま、大、分、に、て、い、ろ、に、船、の、  
良、書、なり。

小兒發熱療方引草 全三冊

此書は、小兒發熱療方引草、なり。其の趣、  
小兒發熱、其、外、諸、病、極、妙、の、方、を、集、め、  
み、ろ、は、療、の、方、を、巻、く、記、す、を、養、生、  
教、を、記、す、の、世、を、ま、し、る、い、ろ、は、分、字、を、し、て、  
世、用、と、ま、す、り、ま、ま、大、分、に、て、い、ろ、に、船、の、  
良、書、なり。

日本茶附記卷之四

夏

此書は、日本茶附記、なり。其の趣、  
夏、の、假、り、假、り、大、ち、り、  
い、ろ、は、分、字、の、引、を、し、て、ま、は、り、の、換、字、を、ま、し、る、補、  
其、中、の、船、語、の、用、の、多、く、は、口、部、毎、  
の、月、令、土、月、を、て、系、物、と、ま、す、り、て、船、語、  
の、多、く、は、傳、を、ま、し、る、い、ろ、は、分、字、を、し、て、い、ろ、  
世、用、と、ま、す、り、ま、ま、大、分、に、て、い、ろ、に、船、の、  
良、書、なり。

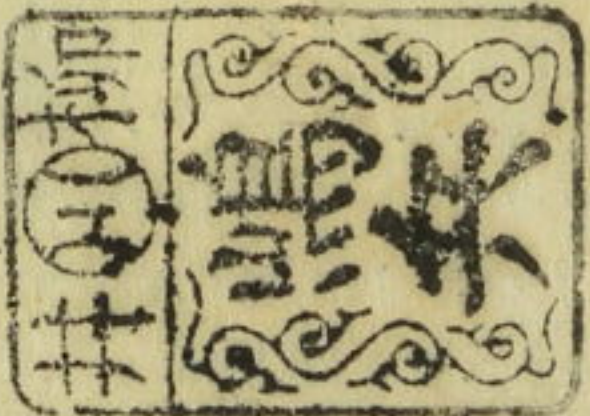
素問のいふ、三月これと、蕃秀、こゝろ、天地の氣、交、り

穀、物、の、熟、す、夜、に、臥、し、起、せ、厭、於、日、志、と、

て、然、る、り、な、り、と、先、英、華、と、し、年、考、を、成、し、也

天、を、と、り、て、涉、る、り、と、ひ、せ、し、畢、く、出、し、畢、く

進、し、長、と、繼、る、り、を、揚、げ、交、り、氣、を、交、り、と、い、ひ、て、  
長、れ、送、る、り、これ、と、送、り、付、る、り、と、傷、り、と、も、收、り、  
若、か、り、



Vertical text on the left margin of the right page, possibly a page number or reference.

千人言方いんく凡交乃百面を所くして却るなりき  
人として面皮あつく癢を生し又面風と云ふは

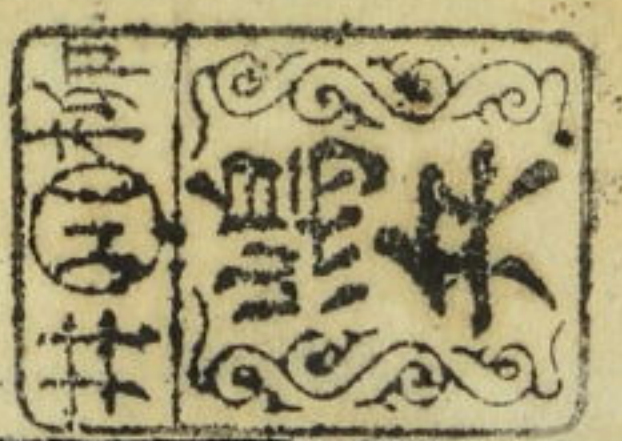
又曰五七廿二日昔は味代食物と云ふは辛をまして  
肺をとおすべし

肉経にのつく夏月冷石鉄拍子と枕し涼と云ふ  
なれば大に人の目と換と

昔は生癢よのつく夏月を換ありある救を食ふ  
これと云ふは換よ一たうへくは

金匱要略いづく夏月冷石鉄拍子と枕し涼と云ふは  
死す我を毒と犯さん宜く苦菜と食しては

これと云ふは



月令廣義いづく夏月より九月より下りまると一切瀟沔也

及水とのむると忌又あるは盥滌と云ふは

又いづく夏月腎氣衰終と云ふは房色をなすべし  
氣を傷り来と換は宜戒之

又いづく汗乃衣裳よ透らると日お病し又これと云ふ  
世ハクろの痺子と云ふは

来書にいづく盛夏熱と散る冷水よくと洗  
ふよ又麻と乾板をむとくや沐浴と云ふは

禁はくし又冷あまくと濯へくは

又とくこなれ暑時を居た上に生れよふ寸髪とれは瘡  
とせし冷あまきと瘡と生す

又曰五月の心腹に腎衰を精化して水とせし秋よ秋よ  
火凝を保蓄して法氣を固とせし考よ熱物とせし  
腹中温暖なり生肌果糖氷水冷淘粉粥蜂蜜を食  
つる飲乞し食とれは多くの秋時よ必瘡癩とせし  
冷水とせし沐浴して面と洗ひ背と淋く事とせし  
人として暑熱眼晴く脈脈厥逆し霍乱筋筋法其  
乃瘡とせし世風と熱く多しなれ眠中よ人臥  
老く扇と揮しひら車なり汗体毛孔用履志く風

へやれこれとせし人として風痺石に言物寒濕の疾  
と熱しむ年壯なりて即言とせし人として亦病根  
を移るあり氣衰し方人を療教し書よ熱とせし  
瘡中よありしこれとせし

孫志人うつく夏月肉は供法有り冷水とのり瓜推其冷  
の物宜く少く食しめくれとせし秋冬瘡癩  
とせしとせしとせしとせし

夏月暑よ傷くせし身疥をぬりし瘡とせし人有り瘡  
これとせし瘡とせし病癩よりとせし某と瘡とせし  
又万葉集十とせし大伴也特喚瘡人哥よ

石麻呂爾五物申夏瘦尔吉跡云物曾武奈伎

取食 櫻繡五乃之瘦と信と事一箇書子と  
凡え作し終しけよと事あり

四月

四月 五月乃節小波を五月の中○五月此是名五月 余形  
乾月 御と仲しよ○四月乃和名と卯月、乙卯の書に  
ひくゆりうれ花月しよと  
略せりし奥義抄の事あり

朝下 國信今日より五月四日まで 袷と恙ゆしと日と衣

ぞしよ古衣にせやくしせり

八日 滋佛日あり 灌佛とせりよ高僧佛の是日滋佛と

あよ都梁香とよく夏衣水と 前金香とよく衣

色多と 丘津香とよく事伊衣水と 洲子香とよ

て黄色水と 安島香とよく夏衣水と 佛原と

灌くともてより 彫建れ灌くよりハ洗ふあふとよりぬ

本朝あく今日佛よ水と信せしひりより 推古天皇

の御言よりとよく事あり

十五日 浮屠の結夏今日よりとよく事ありて七月十五日は

いりて終り是と解なるといふ乃九十日 安曇志と外

よあすり事本農報等とやめく事とねくく事

たりと 祝苑宗規よりと事あり

昨日 沐浴

今日梅雨より先とて屋乃漏るるよと 徳の徳と

田家<sup>まが</sup>原<sup>はら</sup>のよふえへうけよまを霖<sup>あめ</sup>ぬき多く又月を  
 梅<sup>うめ</sup>あつらひ月分<sup>つきぶん</sup>のちと之く早<sup>はや</sup>の信<sup>しん</sup>これとまひ日  
 と云<sup>い</sup>天<sup>てん</sup>をまうく日<sup>ひ</sup>もあつ時<sup>とき</sup>をまひ居<sup>い</sup>室<sup>むろ</sup>と他<sup>た</sup>理<sup>り</sup>して  
 功<sup>こう</sup>多<sup>た</sup>し、これの唐<sup>たう</sup>古<sup>こ</sup>典<sup>てん</sup>の定<sup>てい</sup>役<sup>やく</sup>の功<sup>こう</sup>とて造<sup>ぞう</sup>他<sup>た</sup>修<sup>しゆ</sup>理<sup>り</sup>と  
 まあつ時<sup>とき</sup>の事<sup>こと</sup>とのきより四月より七月よあつとまあ  
 と云<sup>い</sup>二月三月八月九月を中<sup>ちゆう</sup>功<sup>こう</sup>と云<sup>い</sup>十月より二月  
 ぶらまくと鑑<sup>かん</sup>功<sup>こう</sup>とまゆりあつまひは月比<sup>げつひ</sup>日<sup>ひ</sup>あつ  
 修<sup>しゆ</sup>造<sup>ぞう</sup>の功<sup>こう</sup>多<sup>た</sup>うしてたつとまのたうひへし又<sup>また</sup>は月<sup>げつ</sup>遠<sup>えん</sup>  
 梅<sup>うめ</sup>あつらひぬ梅<sup>うめ</sup>のちあつ信<sup>しん</sup>よこれと卯<sup>う</sup>の花<sup>はな</sup>座<sup>ざ</sup>と  
 よ又<sup>また</sup>卯<sup>う</sup>のむなうしとまう

月<sup>げつ</sup>天<sup>てん</sup>氣<sup>き</sup>の時<sup>とき</sup>書<sup>かき</sup>書<sup>かき</sup>等<sup>らう</sup>と日<sup>ひ</sup>に晒<sup>あび</sup>して五<sup>ご</sup>他<sup>た</sup>の  
 へく紙<sup>かみ</sup>又<sup>また</sup>糊<sup>か</sup>とつけとまあをうまう梅<sup>うめ</sup>あつ後<sup>ご</sup>之<sup>こ</sup>  
 とひの色<sup>いろ</sup>めけとれは徴<sup>しちゆう</sup>とひと月<sup>げつ</sup>今<sup>いま</sup>度<sup>ど</sup>あつと  
 衣服<sup>いふく</sup>もとあつしと梅<sup>うめ</sup>あつ温<sup>ぬる</sup>まのりつと方<sup>かた</sup>あ  
 りよまうせの箭<sup>やう</sup>並<sup>なら</sup>む女<sup>に</sup>次<sup>つぎ</sup>あつ徴<sup>しちゆう</sup>生<sup>せい</sup>ませす

此<sup>こゝ</sup>月<sup>げつ</sup>あつしと筆<sup>ふで</sup>を塩<sup>しほ</sup>漬<sup>ひ</sup>め貯<sup>たくわ</sup>へしとは先<sup>ま</sup>はと  
 てこらふとまうとまうしとまうしとまうしとまうしと  
 入<sup>いれ</sup>桶<sup>か</sup>よあつしとよ小<sup>こ</sup>米<sup>こめ</sup>をまうしとまうしとまうしと  
 うけまうしと又<sup>また</sup>筆<sup>ふで</sup>とまうしとまうしとまうしと  
 膳<sup>ぜん</sup>一<sup>いつ</sup>花<sup>はな</sup>とまうしと收<sup>か</sup>貯<sup>たくわ</sup>用<sup>もち</sup>の時<sup>とき</sup>米<sup>こめ</sup>漬<sup>ひ</sup>まうしと  
 一<sup>いつ</sup>花<sup>はな</sup>とまうしと收<sup>か</sup>貯<sup>たくわ</sup>用<sup>もち</sup>の時<sup>とき</sup>米<sup>こめ</sup>漬<sup>ひ</sup>まうしと

とく解あり塩羊の塩湯はくせいの湯に  
一匙一匙も房家心用よるなり

日月の白濁のものを豆大を麻胡荽  
純陽の月をまいた精氣を候て  
産後よるなり又け月暴怒し  
これとせは秋必瘧と云ふ又常水  
いすく事といひ

夏月七味丸と服せば月より始く  
去夏を腎氣丸より始く又夏は地黃丸と服し  
冬は八味丸と服し

地黄丸は夏と同く物あり  
かより多し又藤豆餅の  
肉桂又味子とが  
守夏運生油の  
五月乃七候中一  
去夏秋の二候  
去夏冬の二候  
十月刻二分  
十月刻四分  
十月刻五分  
十月刻七分  
十月刻九分  
十月刻十分  
十月刻十一分  
十月刻十二分  
十月刻十三分  
十月刻十四分  
十月刻十五分  
十月刻十六分  
十月刻十七分  
十月刻十八分  
十月刻十九分  
十月刻二十分  
十月刻二十一分  
十月刻二十二分  
十月刻二十三分  
十月刻二十四分  
十月刻二十五分  
十月刻二十六分  
十月刻二十七分  
十月刻二十八分  
十月刻二十九分  
十月刻三十分

五月

節と芒持と云々と型型といふ。○又月の異名仲夏、暮夏、律と糞實と云。○又月の和名と云ふこと、田子、うらなひ、あまの月といふこと、

略せりと奥の秋の月といふこと

四日 沐浴 糍と糍の<sup>ハ</sup>一餅糍と糍とるふをいふこと  
用ひず 糍米とこゝろめくめく一細米とて沸湯  
てあぬ能く又沸湯めくけり又うへ米とりつ本等  
分けてあましく和し沸湯して煮て一丸ちまに  
解ちとハ米と麩と引ちりハこゝろ一餅はくつ三餅  
とくよ一又糍と煮よ糍米乃灰汁をく煮へ一也  
月令度義よりえたり唐代は端午れ糍を糸多し  
角糍共糍角糍百糍丸糍餅糍と角れあまは

又糍れとくけり又糍角れとく一又竹の筒れとく

ま糍乃糍のあましくけり 糍の糸と糍

けり糍の糍のくつめをけり 我聞あまはハ糍とあま

伊勢抄抄も人れりけりかろ糍とせせりといふり  
又指送集十八乃調書はハハ糍とせせりといふり  
又たんこれこと

て九けりめくもあつりけり糍も乃糍とて

つとめありと角糍と角糍と角糍と角糍と角糍と

明日糍と親戚よ送へ

○國信今日艾草蒲と屋れのこゝに扱ひ

扱はるる糍の記よ五月五日艾とむとひて人形形の  
とくとく戸上のこれ糍とてとてんえり



~~梅原旅日記~~

因依艾草蒲之のこに撥むそかあまきこさるん  
弘化式一二月二日平旦に草蒲蓬花をく南殿の  
前よりくこのむむはてけりりまけりるとみこり  
又松芥り抄の五月四日玉原草葺内裏敷合草蒲  
中より松中納を公権乃のりよ玉原草  
々々としてんあやあなるるるる物記をうり  
ありあの草生るるやと

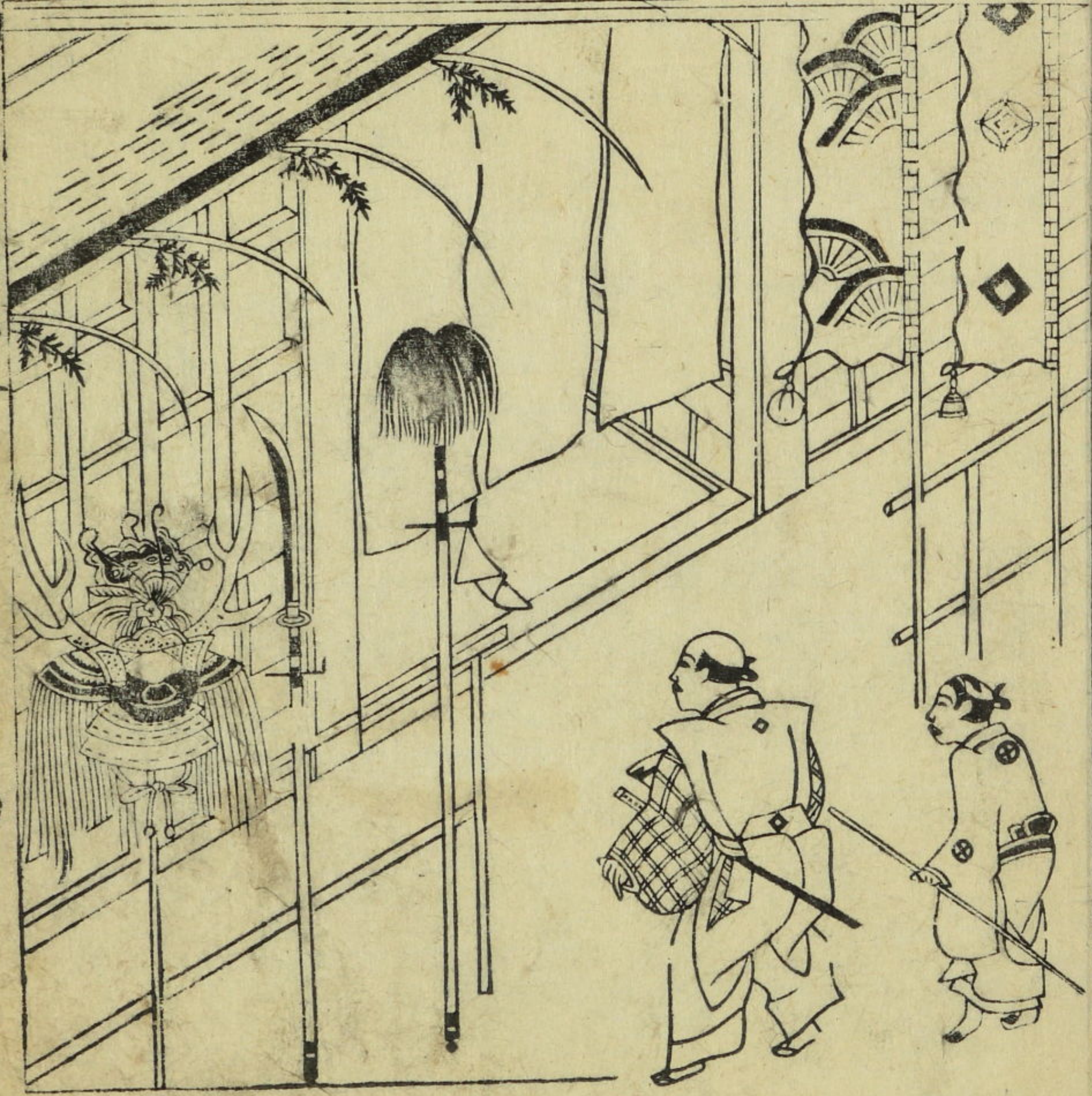
五日

端午と云又云五月五日  
端午は五月初五日也又宋書表云五月五日惟仲秋日也端午者午者五月五日也  
乃又日之れ端午と撰之い月このと撰之うすこかへるる世に  
子と撰之月と撰之  
國依今日松とくし草蒲酒とくし

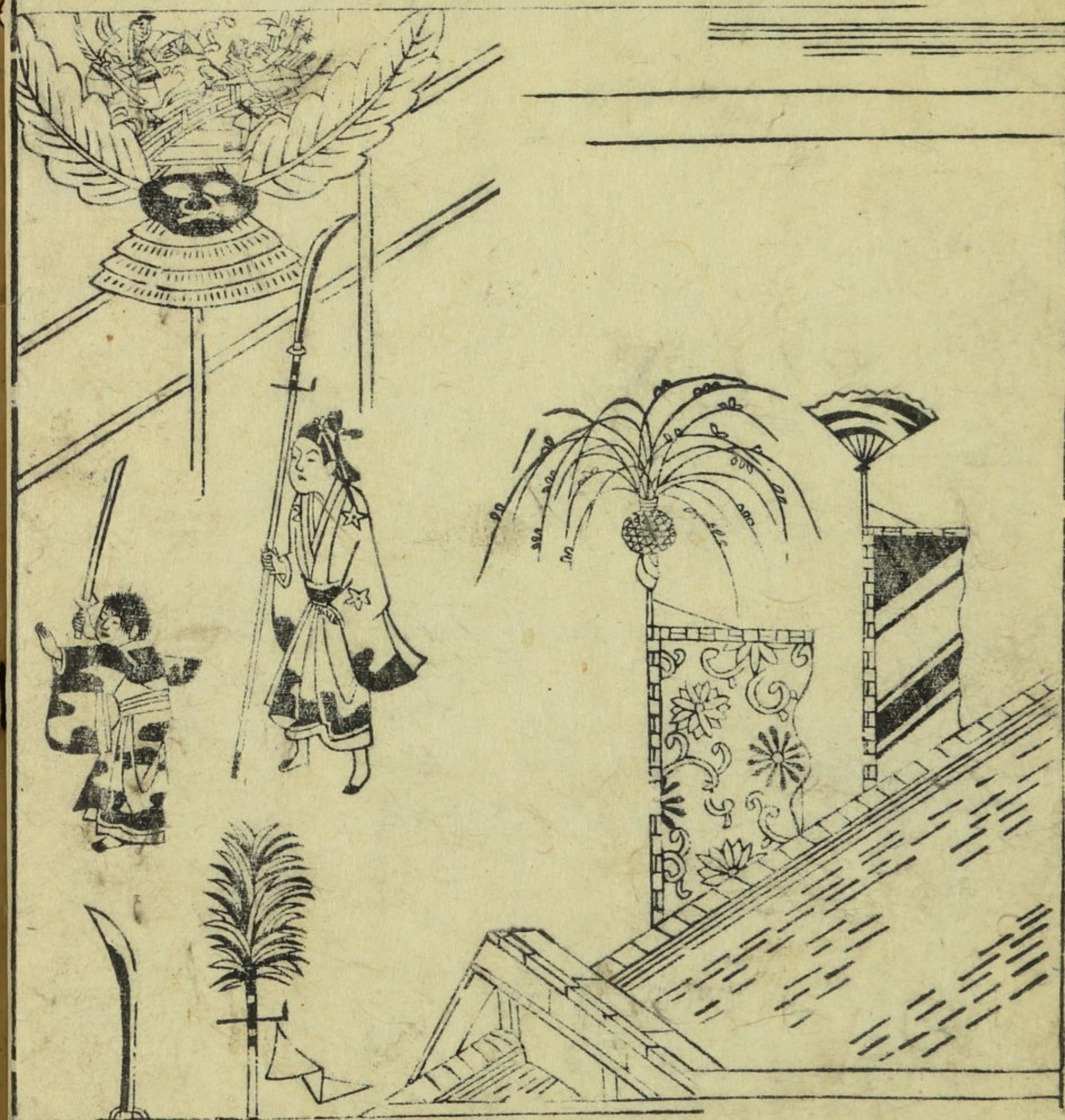
且今日より麻の衾衣と云く八月梅日は夏

撥とくぬる撥散徳記よりを屈原又月五日  
ころ泊屋に投して死と楚人これとあをき  
あは日にちり毎に竹筒に中か米と貯へるに  
投してされとあり渾の或帝の時也乃歌  
回といふの海濱とて改りし一人ありて三  
回方丈と名乗同は保くつく我毎年こつる  
事しれりこつるまは塔より去れとも考し  
故記乃く免ゆるれ食物とぬとまり今よりれらる  
梅樹の葉とつくすのとつくとみ線の家とて





博桑庵時記



梅すん小風俗通よみ日五日五線乃息とありて  
脅いぢりかかれの舌及鬼と遊人をうて瘰癧とや  
まごご〜む一名を長命縛一名を色縛一名を  
纏ちん堂といふと裁入り又提てい要よう録りく又小人端午又  
雜ざ録りくといふ合款と結むすひひ解ひ又纏ちん一といひか  
りまごご意あり〜

○又世傳又今日菖蒲湯と用之沐浴するなりあり  
抄たひとく小さい大たい裁さい終しゆうよ五月五日菖しょう堂どう乃沐浴也ありて  
楚辭そしにも浴よく菖しょう蒲ぼ兮や沐浴よく芳ほう蕭しょうとえ之の入いり今世人の若  
菖蒲と用之沐浴とあり〜

心  
心  
心

○又今日婦人女子たりふまよ菖蒲と取とりと挿さこ又  
勝かちよまよ〜如此とれい病と瘰のくと俗といひゆらり  
策さく對たい雜ざ記きの端午乃日菖蒲艾と刻きてくゆさの形かた又  
俗しやくり又また菖しょう堂どうの根ねれ〜これを帶おびままの邪よこしま  
系けいとと辟はくとと記きせりか家老俗しやくりや王わう派はいるる帳ちやう子し  
〜い〜くく明めい約やく知ち是これ天てん中ちゆう節せつ旋せん刻こく菖しょう蒲ぼ要よう辟はく和わ  
又また菖しょう蒲ぼ乃なり結むすよ玉たま燕えん叙ぎょ臥い艾あ虎こ輕けい

○今日京師きやうしの菖蒲乃結むすあつあつ懸けんるあり邪友七日の邪よこしま引  
潔けつ斎さいとして系けいありその敷しきつつ足あし朝あ日ひなる乃是とそ  
ろて一二の書と定めり日ひの表ひょう来きたと意い〜

二つ又よきより勝る本とてふ場は西の方に楓葉  
 あり乞より水より清く香とくれりと員とす  
 拙於法人群集とを以故よる場はあつたの西せく  
 大夫の松林樹よのりて心やをるに足りたり  
 時は梅樹を家のまはり立ちたりものい場はあつたに  
 多つるさうに松をつててさひちるさうにせまらる  
 及びにさうらうに群集れ中へけこあはれん  
 こそ竹林とつたるる乃松よりきこはるなりや  
 たつまらるる松とさうらうに松のあつた  
 松とまらるる松のあつた松のあつた松のあつた

船よあり事とていふ事あり又人る川中すて  
 けて川よとち衣裳とぬくしてうらまひか  
 潔斎とすはとていふ事ありて客人の縁たつた  
 ことさうらうす清くさうらうに元々松の村民社人  
 なるす事ありとていふ事ありつたは松の松とて  
 我亦此松とていふ事ありとていふ事あり松の松とて  
 ひつた大向松松松松松松松松松松松松松松松  
 ありては松の松とていふ事ありとていふ事あり  
 松の松松松松松松松松松松松松松松松松松松松  
 松の松松松松松松松松松松松松松松松松松松松  
 松の松松松松松松松松松松松松松松松松松松松

ふ日のみ佐いよれ人を仕るるに業ありの察乃出する  
み業く競る事ありと今聖教少く朝日足然  
五り競る事ありに人乃競勝走るの儀或は  
按とゆふ文野雜編の編年日走る習之勝柳と  
あまむらうつと今日るとまて此方の坊あり

○今日山城紀伊郡深草乃里若井森の祭あり  
遣とまて競るあり此社を延喜式より志保寺  
乃神社なり日本後紀の鴨別雷神社の別也や  
とりとるいふ三所は皇子とまてあまむら  
み良親王伊豫初王井上門親王也今日祭

舟よりひをまはるるの光化天皇乃御宇天孫元  
可吳國乃凶賊素本より守えられん天孫元  
涉子乃皇親王に大御軍とて運落ありと一宣  
旨ありとまて苗抄の形に記して又月ありと  
志保乃邪義とまてとまて徳又大風吹来りて大瀬波  
とひあぐ一とまて一賊一賊とまて及に流るる  
ひあぐとまてとまてびとるを爾親王乃出た  
率勢乃と海とまてひけとる又都那の幸又今  
日善海のかもとたのともとまてとまてとまて  
ふゆとるはとまてとまてとまて紙人形と

ついでに松と曾此形より又菰の葉はくま  
俗に草木と菰の力のつくまの葉をくまの葉と  
作りしつを年の風信美巧とまのまを本と作りて  
くま此形とまの葉を又作りしつて葉をくま  
或甲冑とまの葉とまの葉とまの葉とまの葉と  
先く戸外より作りしつとまの葉とまの葉と  
まの葉とまの葉とまの葉とまの葉とまの葉と  
たまの葉とまの葉とまの葉とまの葉とまの葉と  
まの葉とまの葉とまの葉とまの葉とまの葉と  
て思ふ此形事なり

柳とまの葉をくまの葉とまの葉とまの葉と  
雜記めまの葉とまの葉とまの葉とまの葉と  
又まの葉とまの葉とまの葉とまの葉とまの葉と  
まの葉とまの葉とまの葉とまの葉とまの葉と  
形に他まの葉とまの葉とまの葉とまの葉と  
まの葉とまの葉とまの葉とまの葉とまの葉と  
まの葉とまの葉とまの葉とまの葉とまの葉と

○今日まの葉とまの葉とまの葉とまの葉と  
又日中民強の強百草又百草と闘しむる乃  
ありとまの葉とまの葉とまの葉とまの葉と  
日本紀は菰葉とまの葉とまの葉とまの葉と  
二五事とまの葉とまの葉とまの葉とまの葉と

又章第云り誘又今朝園草に宜男と何り致ふり  
 園草乃竹小共圃今仍結盈襪百草又香こも何り  
 百草の汁と搗るり糝と膏と膏葉に記さ  
 五二百草病瘕症又脂一七膏の膏葉よそ功十倍  
 せり又今朝日未お付るまよ搗と汁とつと出  
 石灰又和志と餅と一法花とす一切乃全瘕と治  
 じと月令廣義又凡之とり  
百草と取よ牛膝浸漬を草  
 葉とすす、常信化毒略  
 〇夜集草と之丸納り日なり又艾とよと丸納り  
本草綱目五月  
 廿日採艾治百病  
 九艾とよと誘午よと丸納りと一

と但艾乃苗下へふけりりりりと穢之丸葉英に  
 乃ととりおにうん艾を促多とす一又搗付は  
 之れ用へりり之れとも使使もとすい性り又紫金  
 錠は金丹千金錠もたもと合りりあを今日り  
 〇又今日慧液とり事何りこれ唐原ととら小迷意  
月令通考云六越地也と引て慧  
 液は越と句越と始と記せり  
 石屏り誘午乃後よ  
 榴花角黍舊時新竹處志と石酒樽堪笑江湖  
 老詩客也隨蒿艾上柴門  
 又 友人  
 滿榻花上滿るる何切草露花漏醞今日獨醒無用



中又為天痛飲漢雜語

十三日比日竹と後栽へ一畝書に八月十三日と作碎  
甲子又作迷日もいふこれ日竹とうぬきいふか  
新の活とあつたり

梅の活

比日活友よりこれと梅取らるつくと又徴取らるり  
梅雨代中肥土に芙蓉石梅梅植たすの枝とあつり  
ててと一と月令廣義より見えたりは時其土  
つし蓄積水櫃をうせむ甚よく活又其家入功  
をいじりて奴僕事と廢しおこす十の家に利個

りし梅取らる森の中を流僕をうて薦と何見  
庭とほらうしむし一薦を書籍並に食油等と梅  
新よ裁しつら草の木葉荒よむらひ燗屏を草由  
を幼用度し又梅取らる大瓶よ貯重糸と整  
とれいんれつとまゐりとは書活に見え下世日  
とててを飲りし身又梅取らるわく痲疥を治へ  
るれおとれし薦と他りこれと用きり整  
やとく衣取らるこれと用れり皮けのまし  
お取ら食相おまより見えたり  
梅取ら入り説話とて一決し証し梅取ら



梅と為し重々乃物に塵耶夫人の中陰は命なり  
此小善なりとあり画事とのづくとり予計あり  
申る生六七午二候乃内交の身二候有是ハ乞に  
附事して善徳をとりなり

夏正の日井と後水と改れハ瘧疫を止すはと謹此礼儀  
志よ足とより又夏正乃後雨丁は雨より日支ぬの交  
と改れハ大のありと千金方以てあり

六月ハ初善梅と紅皮とより梅と善善ハ入火より  
梅ハ善く後收用と鳥梅とハ皮をとり時とそく取  
へし又梅ハ善梅なりと製成へし

六月米苞を改米ぬへし喪くハ苞ゆりめハくす  
生ハ又及乃有拾穀乃所と多く米苞にぬり善ハ不喪  
六月天樞中腕もよ矣一異月のことありくハ保善なり  
又梅善と保善とへし梅致餘論よとく女ハ於急必指  
宿る漢味競く業く於善護也保善金水二勝正燠火土  
之取尔

月令よとく是月也日長至陰陽氣死生分君子戒  
掩刃母澤山考色母或進居滋味母致和善者欲定ハ乳又  
曰是月也ハ居之可ハ善也  
保善人徳よとく乞月井乃深井乃中よりくすかれ善







歳は元年より十一年までのある一はるは十は後河  
 にはる今日一人のりもすもの後よきむかひ  
 右れ申後たりあきされたるあはれもあはれ  
 今指とゆは甲子物徳の徳よき人のこゝろのり  
 其のり海よえたるよあ人信りされたる徳  
 江邊津身ら重根深年ゆひすたのりもあはれ  
 ちと國史もあきたるあはれもあはれ  
 是れはあはれ後のもちたる世にたれまらるる  
 れ中朝のあきたるあはれもあはれ

晦日 活はい日と月とく入る事たり世後國書よあはれ

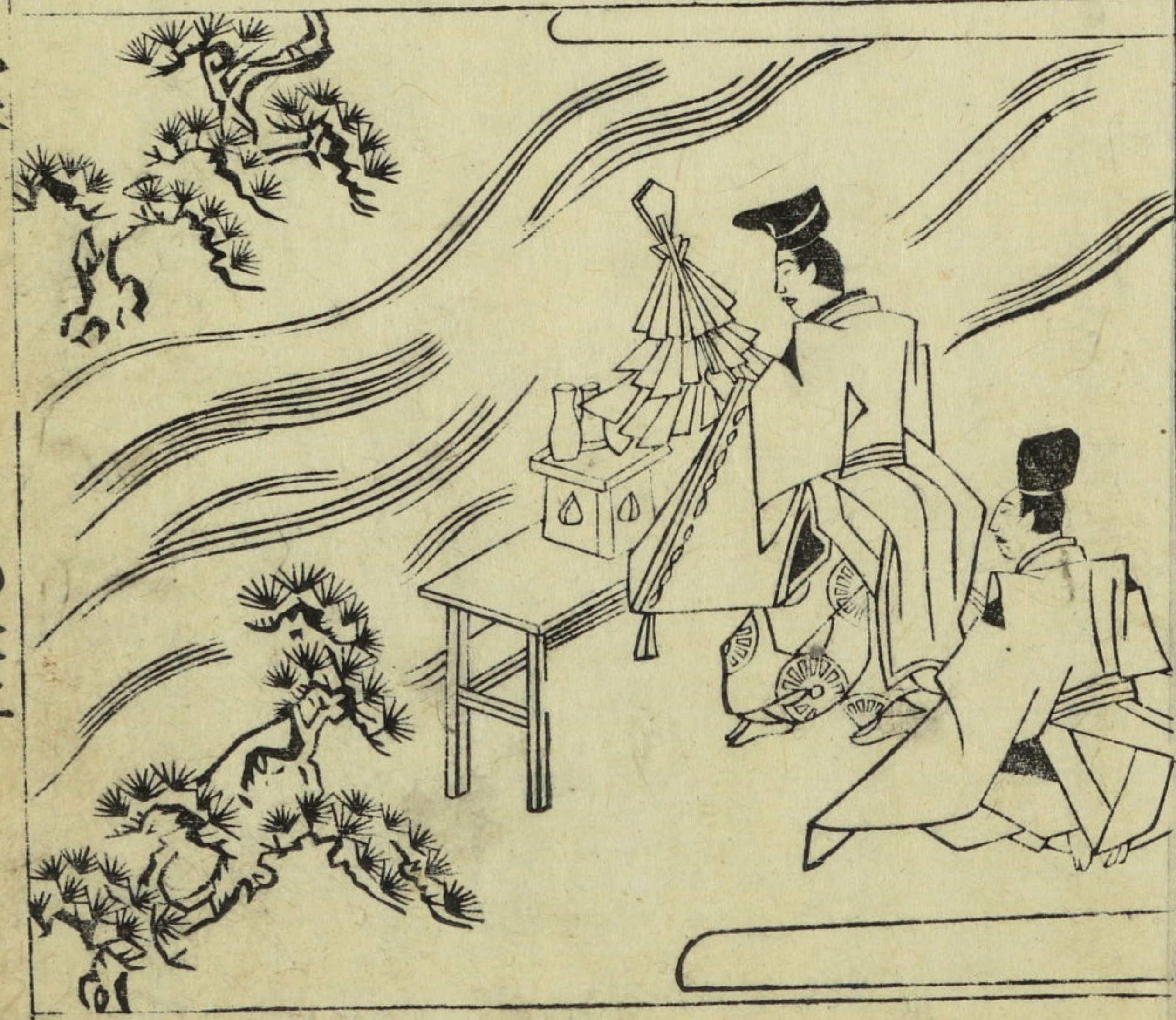
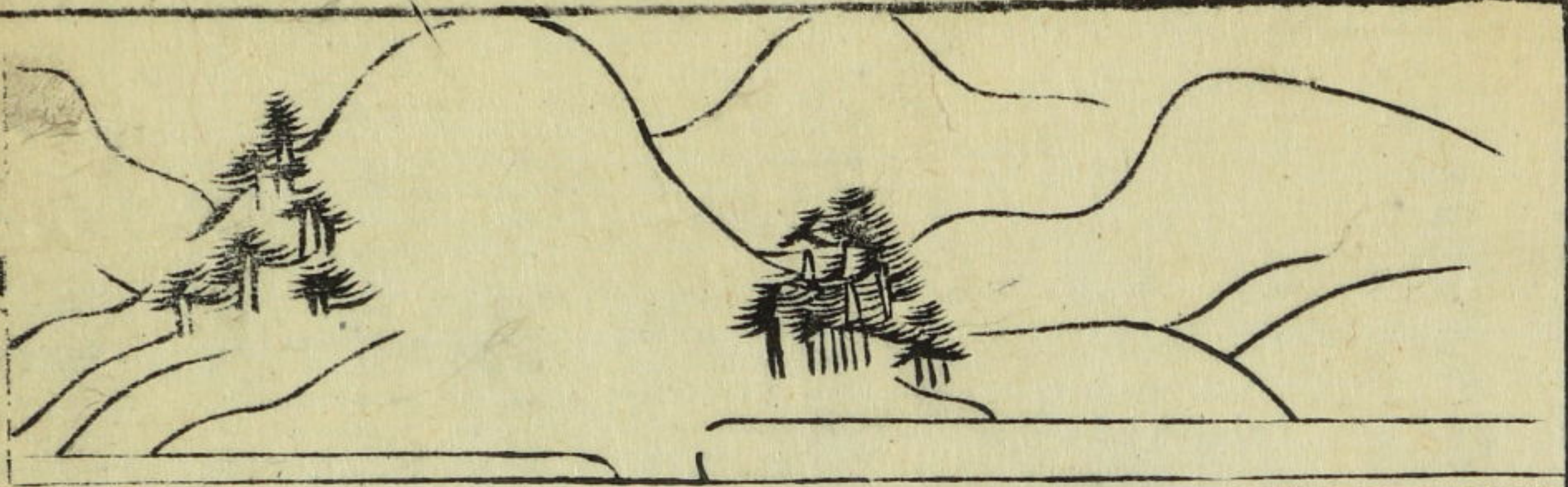
ちと秋のちたると後まらるる功徳乃信りたる天  
 武天皇乃御河よりちたるわつ大後とよの末程の  
 ちと百官の國たたりたるわつたるのあはれは  
 ちとあはれ

ちと月たあたるの徳もあはれは  
 のちとあはれは  
 乃國たの徳は

ちとあはれは  
 又徳もあはれは  
 又徳もあはれは

とつひつをたつらにけりて  
 志くは春のこゝろの  
 ことばのわびやとよは  
 幸は後れ月よあつとよ  
 人形と他はあはれな  
 とおぼしめし

いふ御抄よとくは月夜  
 小きこゝろにさむら  
 ちかぬとほしき  
 一葉展川にのみ





三やえりくすの節は月をくくは河原  
ゆくの世も月のあつたとみこころなりと  
宵月晦日ありてこそして翌月へは  
念ふ心乃海よりくく月は人の  
疑之古人古月は必出川至法  
作は遊友は無恒例也有限時  
務もえは比或人記海念小  
く中休之件法宵月十三日也  
強よありて路くあり

九月三候しりる候人多くありて九月九日

夏三月九十日あまの秋の初日  
ありて秋のうつろひの初日  
志く冬は氷よかたる氷生木なり  
志行木より休本を火なり  
あつる金生ありたりた  
火毛金うて金火は  
るの休休も度金なり  
第三候と初候と  
第一候を末候といふ  
三候と云元日中  
候す臘八日

梅屋敷の後書と日又物と一紙新舊よひる表  
紙とよんで控す帯繩の無る物と表裏の控す  
天氣好日ありとも一日にて後たり一紙  
一午未れば收む晩より暴風の至りたる收  
止し一層下よあきて變をさよ一紙書きて明  
朝家に初むる書を晒すより一面よ多物より  
らに暴風の起るにあり又多之れは表裏の  
徳と心と用ひす書とところあるより控す  
わらへ修繕しぬらるとら多と獨ひ終る古故の  
こく控中に細音と心と好むく之書と用ひ

屋中に久しを晒さんよりかたかく烈日に一交晒  
たりり書とより控すより毎年久しくさ  
そをいさう書れ控すより古人を書と初より  
と尺とよりとさ色をよめ表紙も表裏と下よ  
とよめよとさつらに居るに用よとて古人書と  
多に多く書と用と書とさく今八七里書と  
也あり  
但ても書ハ山勢れるや書ハ又ある書ハ書ハ  
報告の多し初よりとさい今私信つら書と書  
証書とさつらと一又書と書厨の中よ入るハ書  
ゆく一はと控すを角とさす

圖畫を讀むも一時許り物と一乞と書と書







魚羹食をくと井中よつりたけしとまらぬ  
月令度まよるなり又月令度とぬるを  
とどのこくこおき間とるわよつりし神の中へ入  
至ハ之へ指さし餅とあして食くししや  
片心香角よとくし又麻栗水を折まらるる魚用  
と漬し至ハ指さす

又月よ製しはら菜とてまるとけい味とわく製して  
世行くきり酒の又志うとくうよとくしと能く  
ふん強とせし井の中よとるた庭ののしり  
いんちとけしけしきしとくしとあてしぬき  
酒を少くおしとくし

水月山林よ出まわると多く成野しと山梅を  
取ら多く買貯しとあぬた味りつ時割し物  
しと又炭しと買貯し

菜瓜と多買とと蒸しと脯と  
○乾瓜とくしらゆり法 瓜とてらよまらかうこと  
瓜乃片玉のみり八九多やと塩と入し一枚しとけ  
びりなかりとんやうらとくしとくしとくし  
久しとやちとくしと又まきよまらとくしとあつりて  
後行し

○ 瓜と糟淹よまら法 世倍よ當ふつけと云瓜と云  
母よつと移と丸くうらうらと云云もあつひて各氣  
乃未だやうよかえう瓜乃片されの内よ塩分あ  
や入瓜あつくと丸分目を入桶よ入すくと一紙  
うけ二枚あはれと丸かきも塩汁にてあつひて塩汁  
乃むくはあつくと日よあつとさく瓜よ糟を多くあつひ  
せよと移入すくと瓜のつとあつひてあつひて  
うよ塩とあわれあつくとつとにまきう糟も塩あ  
せよとつと一太抵糟きまよ塩み合やせよとつと  
糟多く瓜とつたがう一瓜多く糟すくたはれ一

俗の瓢たこめよりすいた瓜とはく一瓜あつとつとつとあつ  
ましつとつ瓢のつとつとあつとつとあつとつと  
赤まあつとつとつと一桶あつとつとあつとつと  
まつとつとつとつと一桶あつとつとあつとつと  
あつとつとつとつと一瓜あつとつとあつとつと  
つと一又瓢を瓢あつとつと一紙塩よ一紙あつと  
うけつとつとあつとつと一糟よけつとつとつと  
瓢たこめあつとつとつと一太抵糟よ一紙あつと  
○ 乾瓢乃製法 ぬる氣とつとつとあつとつと  
あつとつとつとつとあつとつとあつとつと

あるへこ後丸をして繩よりけりやひきりり一  
 天草子くくたのくく水へ天氣好時五年一  
 繩よりきくをひき一絶ひる所壺よりよ入るめ  
 一垂り一太氏くく切して後沸湯とくくくくせり  
 交を魚ひるるとくく味あをく

○塩干瓢乃製法 瓢を大片より切ついで干すと  
 うき並ぶるをも日けてり時乾かすやて後一和  
 こへ細くまきり一味者の人へに治くさるやみお尋  
 ○乾菜子の法 日くく菜子とをゆと煮て之をゆ  
 て干金車よりぬ取ぬるの法とくくひくく一七五  
 心かへ一 地味お尋まきとゆきとゆきとゆきの原  
 十世くくまハス一くくまうとりり

○紅豆塩淹の法 米粒と干豆と塩を升り合きつ  
 くの煎豆と煮るといふ法とくくけいんくく換せり茶  
 子も又かくれくくまき一

い月粉油平一や細くまきと製法一  
 ○鹽油の製法 大差 大豆 鹽 各一石 水 二石二斗  
 煮てつる 先大豆とゆきとくく粗白くくを煮つとくく  
 石臼よりくく引りり大豆と煮つ大豆乃くく煮て大  
 豆の粉とくくゆきと痛葉のひんちと煮つ入類と  
 たり粉塵の結けりり阿右ら石と斗りぬく一塩







乃大をくるとつらうて蒸し熱したる時細末の五精  
 と挿せ土を敷き入粉せしと種するはそと麴麴の付  
 一三日毎に蒸か如て厚くし切らる 白鹿これかきおやく 塩田まゆまきやく  
 合た蒸すく尻ごと下合の塩を合せ梅は入せしうけ  
 一夜蒸明りうとあつらふと麴麴をいし見かかると  
 梅のしとあつらふと梅は入せしうて梅のしとよく  
 うけ蒸す毎日一二つなりはせ十日許まで後苗考  
 の種皮の板種麴麴を蒸すと能くよ切し、挿又あつら  
 しくさつらうて蒸すうけ蒸す毎日いせ十日  
 まで用へし三四十日よ及いぬ味は、あつらふとあつら  
 五條いふ事うれ人乃好まうと

五條いふ事うれ人乃好まうと

○蒸年勝の製法 蒸く酒く等うと合せ蒸す  
 蒸く酒くとあつらふは月土用乃中蒸かろくゆ水  
 炭日は勝し七十日をくこれと用ゆるめく  
 たうやとゆくと水と等かつ入毎夜あつらふと  
 又あつらふ乃勝くしあつらふ又蒸す乃蒸す刻てあつ  
 らうと入るは蒸すくあつらふゆと蒸す勝くもあ  
 日和りる時梅をよ換塩したる塩壁と修治しと一又  
 海塩の塩を早まらぬ井と造る是願ととあつら  
 白砂を入しとあつらふは味は氣味さうとよくなる

元刀細陰の刀繼をとも是月よ夜をぬくはこれハ續まは  
元帝の時もよりぬくは又此月を控る御  
才とともくこし

夏月故虫と去法 養和 夏本整仁ニテケ 雄策 列研 竺

細糸しと密して懸丸しと懸丸よれと焚く居家

為母よらとて又懸丸の骨を焼く故は免るはこれ

骨しとてとて川魚の骨を焚くは皆故とて又

浮萍と懸流とと焚てとてしと月令廣義我より元

より又千金月令のいふ月よ浮萍と取く陰平よ

一雄策よとてと焚くは故を解と志るなり又此月

又日田中の浮萍と丸晒乾し一依は夏凡血と取くこれよ

漬し又物し又漬すぬきとるなり故なりして後来して

考とて一熨之たよ故とてと居家を依よりてり

麻の葉とけりなりよとけりよと敷ととるなり物取お武

高よとてとり和信よハ櫃乃末ととくこれ又と敷と

さるなりとのなり物とけりなりとけりなりとてと

なりと一古今集意乃歌よ

なりとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと

なりとてとてとてとてとてとてとてとてとてと

東回押原厚籍 去徳被蓋 権印伏除



凡暑熱乃時移會と保赤にして僅て熱退るといふは  
 毒也保元といふは六月に入房勝似炎膏旨又涼火  
 うらぐ夏内流気内は伏し暑毒外を蒸すといふは  
 甘く風をわくう冷物と食ふは暑毒外を蒸すといふは  
 暖方の物と食飲して大に飽るがれ

園菓の花をよきもの日よくむまをて涼の寒気は收  
 て多う暑を涼く一日午の草一は内水とそいひ  
 冷燗お通て乾弁たよ栝うは月令寒氣を及えたり又  
 老圃乃云暖な地をさめはる所をく渡下く次子  
 候よりと但暖くはさうく涼朝をさく渡下

月令度暑といふは六月は栝楊の水とさうく地土といふ  
 乃原羊の糞と壅之いふは多し

秋のは颯風吹取さうは何ううめま候とす栝楊と  
 圃く一第否乃栝と堅くといふ又栝楊と他い  
 月進して食は日と昏す羊肉とくは神宗と湯の  
 聖鳥厚鷲菜黄と食うと也又生薬と食は水瘧  
 とすは犬のぬき嚙るれは終身患とすは冷食は言  
 用し冷水生破果油膩甜食とす食するはさうれ  
 凡菜炒燻食は存味は宜くわく用し  
 凡之乃百種瓜とす食するはさうれ瓜のあま入沈







白乃久しきやまぶるふ周くすれつて強ひりかた  
衰えたる病人よ病多能多贏と強し用ひ  
未だ強しとく強てし



日本集時記卷之四畢

金

四糸子四冊之内

金重

丹云  
防羽柳舟方  
集金  
唐乃金重

